

Que Será, Será

VOL.68
2012
SPRING



横浜 三溪園の桜 横山恵子撮影



不安のない生活——
(13) 仏道修行はトータルペインを和らげる——最新脳科学からの検証

医療法人 和楽会 理事長 貝谷久宣



「ブツダは安らかに入滅されたか？」と題する論文を最近執筆しました(心身相関医学の最新知識、久保木富房・久保千春・野村忍&不安・抑うつ臨床研究会編 日本評論社)。ここでは学術的なことはさげ論旨を説明したいと思えます。結論を先にいえば、仏道修行は死の苦しみを和らげるといふことです。終末期医療では**トータルペイン**という言葉がしばしば使われます。それは**身体的苦痛、精神的苦痛**―不安・恐怖、**社会的苦痛**―経済、家庭、仕事上のトラブル、**スピリチュアルペイン**―人生の意味、死の恐怖などの4つに分けられます。

大乘仏教では布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧という6つの徳目―六波羅蜜を実行することが仏道修行だと行われています。それを簡単に説明しそのような修行をしたときに脳のどの部位が活性化するかを最近の論文から調べてみました。
布施(ふせ)は慈悲の心をもって、他人に財物や親切な行動や心を与えることです。慈悲の慈とは他者に利益や安楽を与えることと与樂であり、悲とは他者の苦に同情しこれを抜済しようとする思いやりであります。最近の脳画像研究によって布施は前頭前野B領域を活性化して行われていることが明らかにされました。
持戒(じかい)とは戒律を守り維持することです。言葉を変えて言えば、道徳規範に照らし合わせ、自らの欲望を制すること(セルフコントロール)でしょう。脳画像研究によって、道徳的判断にはB領域とE領域が大きな役割を果たし、道徳的に関係するセルフコントロールにはC領域とD領域の持続的活動が重要であることがわかりました。脳に電磁波をかけA、B、Cの

不安のない生活—(13)仏道修行はトータルペインを和らげる—最新脳科学からの検証

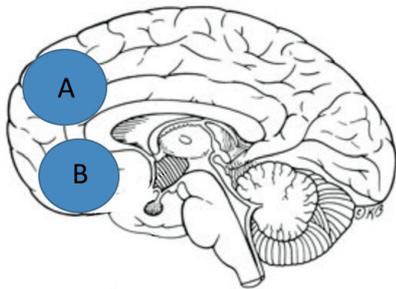


3領域の機能を一時的に失わせる不道徳性が出現することも証明されました。

忍耐(にんじく)とは、様々な苦難や他者からの迫害に耐え忍ぶことです。忍耐修行には、寛容性を示すB領域の活性と欲望を抑えるD領域の持続的緊張が必要であることがわかりました。

精進(しょうじん)とは、①事に当たったらず始める、②躊躇しない、③意志を強く、④飽きない、⑤やるべきことは最後までやる、ということですが、すなわち、努力、注意集中、間断なく最後までやり通すことと理解できるでしょう。精進でもやはりB、C、D領域が大きく関与しているといわれています。

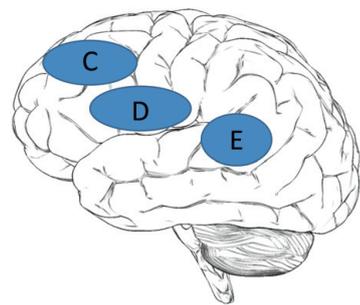
禅定(ぜんじょう)
禅定とは、どんなことが起こっても迷ったり、動揺したりせず、静かな精神を保ち、常に真理に心が定まっている状態をいいます。すなわち、



坐禅・瞑想をすることです。坐禅・瞑想で脳がどのような変化をするかという研究はこの数年盛んに行われています。全世界的な禅ブームのためかもしれません。

熟達者の瞑想中には、自己の客観視、他人の気持ちを観察するという人間特有の精神活動、共感などの機能と関係するA領域の活動性が高くなっていました。痛みに対する感受性を瞑想の熟達者と健康人で比較した研究があります。上腕に電極を張り付けて電流を流します。電流量がある一定量になると痛みを感じますが、瞑想熟達者は瞑想をしていない健康人に比べ痛みを感じるのはより多くの電流が必要でした。すなわち、瞑想を繰り返すと痛みを感じるセンサーが低くなっていくと考えることが出来ます。

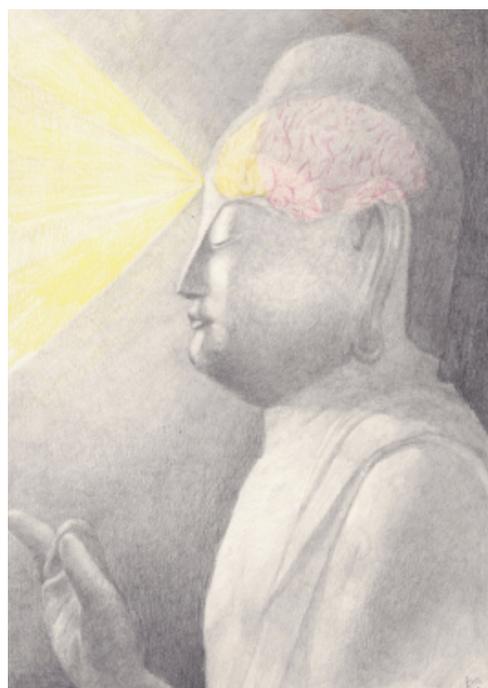
智慧(ちえ)
智慧とは、一切の現象やその背後にある道理を見極める



作用です。仏教で智慧という言葉は結局仏教の真理を洞察する強靱な認識の力をさしています。智慧は、情動をコントロールする前頭前皮質の機能全般に関係しています。すなわち、A、B領域は情動の誘発と利他的心構えと関係し、C、D領域は、評価し、道理を与える、努力するといった精神作用に関係しています。六波羅蜜の修行の中で智慧は他の5つの修業がなされたときに自ずから出来ていくものだろうと私は思っています。ですから、広範な脳領域が智慧と関係しているのです。

精神医学の最近の研究によれば、不安もうつも結局は個体の危険を感知する扁桃体が過剰に働いていることだと考えられています。扁桃体の活動は前頭前野、とりわけここで示したB領域がブレーキとなって働きます。ですから、不安もうつもB領域の活動が低下している状態と考えられています。最近、NHKスペースナルで放映されたうつ病の最新治療に出てきた深部脳刺激治療はこのB領域を活性化

する処置です。近年の脳研究によれば身体的な痛みも精神的な痛み(社会的苦痛)も結局最終的には脳の同じ部位が活性化されていることがわかりました。この痛みで活性化する部位は前頭前皮質、A、B、C、D領域の活動により弱め



られることが明らかにされました。このようなことから六波羅蜜を行えば、精神的な悩みも身体的痛みも脳科学的にはすべて和らぐことが明らかになったのです。

仏の眉間にある白毫は白く長い毛です。ブッダは白毫から光を放ち、東方1万8千世界を照らし、衆生を救われたと言われています。ブッダは白毫から放たれる偉大なる智慧をもって衆生を導いたのでしよう。その智慧は六波羅蜜修行で得られた高度に発達した前頭前野から発せられるのです。この智慧がほぼB領域にあたる白毫から光として放たれ、世人にあまねく行き渡り、衆生を苦悩から救ったという一つのたとえとして考えることができます。古人は当時すでに前頭前野の重要性を認識し、仏陀の

32面相の一つとして白毫を加えたのでしょう。

ケセラの読者の大部分は仏道修行とは関係がないと思えます。仏道修行といわなくても、他人にやさしい言葉をかけ、節制した生活をし、辛いことをじっと耐える自分を見つめ、一生懸命仕事をし、常に心安らかになるように腹式呼吸に努め、ものの方を多面的にして広く社会を見つめ、自省の生活をすれば、不安のない穏やかな生活ができるというのを現代科学は示しているのです。仏道修行という大げさですが、皆さんの日常生活の中で実践できることばかりです。

病(やまい)と詩(うた)【22】 — ハトの天敵 —

東京大学名誉教授

大井 玄

ハトを盛んに捕まえた時期があった。

1970年、東京都新宿区牛込柳町交差点付近の住民が、空気中の鉛を吸って鉛中毒になったという騒ぎが起こった。当時はガソリンのアンチノック剤として四塩化鉛が使われていたから、鉛粒子が空気を汚染しているのは当然だった。しかし車の渋滞があるとしても、一般住民が鉛中毒を起こすという事態はたまたまではない。その真偽を確かめる必要が生じた。東京都は衛生研究所に公害研究室を二つ新設し、私はその一つに係長クラスの研究員として入った。

まず手始めに地域がどのくらい鉛に汚染されているかを調べる必要がある。しかもそこにいる生物に汚染状況が反映されているなければならぬ。人間と環境をともしにしている動物には犬、ネズミ、猫、ハトなどがいるが、私はハトに目を付けた。まず一年を通じて同じ場所にいる留鳥で、たくさん捕れるだろう。呼吸量は体重当たりヒトの7〜10倍だ。筋胃で固いものを砕くのに必要なため道端の小石を呑みこむが、それにはガソリン由来の鉛粒子がついているだろう。しかも血液を採っても、臓器をとっても誰からも文句はつかないはずだ。

多数のハトを捕るにはどうしたらよいか。その頃山科鳥類研究所が渋谷近辺にあったので、渋谷駅に多数巣くついているハトの捕り方を訊ねに行った。頼みを聞いた古参の

研究員はハトなんぞ鳥の中に入らないという口ぶりだったが、それでもハト捕りの方法を伝授してくれることになった。渋谷駅から元の東急会館のほうに伸びた通路のガード下には多数のハトが巣くついていた。その島のような空き地に、ネットを張った二本のポールを横たえておいて、ハトが集まったなら、ばね仕掛けでそれを180度反対に倒し、一網打尽にするという案だった。

前夜、私と研究所の若い同僚は駅の近所の連れ込み宿に泊まった。宿の者は不審げな顔をしたのでゲイの趣味があると推測したかもしれない。朝四時前、約束の場所に行つて鳥類研究者の手並みを見たが、ハトは一羽も取れなかった。警戒したハトたちは下に降りてこないで我々を見ているばかりである。珍しい野鳥について知識豊富な研究者は、ドバトのようにゲスな鳥の行動特性については無知なようだった。

ぼっぼっば 鳩ぼっば
豆が欲しいか そらやるぞ
みんなでなかよく 食べに来い
(文部省唱歌)

結局、私たちは伝統的手法つまり素手でハトを捉まえることになり、これが効率的であるのが判った。

それにはコツがある。豆か米を撒いてやるとハトが沢山集まってくる。頭や肩に止ま

るものさえいる。しかし構わず何気ないふりをしながら、足元で豆を呑みこんでいるハトに狙いを定める。素手ですつと両翼の上から背中を捉まえるのだ。一連の動作は、よどみなく、自然でなければならぬ。捉まえたハトは反対側の腕のわき下に滑り込ませる。次にもう一羽を肘と胸の間に挟む。周りのハトはそれを見て逃げたり逃げたりしない。柱の陰で相棒が大黒さまの持つような大袋を用意して待っている。それに入れる。十五分ぐらいで二十羽ぐらいは楽にとれた。

ハトが危険を知らせる合図は羽ばたきである。仲間が捉えられているのを見ても逃げたりしない。生物はそれぞれ危険信号があるらしい。ヒトだつて大気中の二酸化炭素濃度が増えたり、北極の水が溶けたぐらいでは逃避行動をとらない。地球温暖化の影響で大干ばつや大洪水が続いても、まだ自分だけは大丈夫だと思っている。

私たちの捕獲行為に干渉したのは、ハトに優しいヒトであった。ある時小笠原島に移すため渋谷でハトを捉まえていると、中年女性が二人やってきて何をしているのかと詰問した。顔色が変わり怒りの形相である。これは鉛に濃厚に汚染されている渋谷から鉛汚染のない場所に移すためにとっているのだと説明した。「鉛がどのくらいか見ると、そこから抜けていくのか見ると、す」彼女たちはたちまち和ん

だ。「そう、それで幸せになれるのね」

数百羽のハトを鉛汚染の生物指標として捕えたことだろうか。明らかにしたのは、都内で車の交通繁華な地域でのハトに反映された汚染は深刻だという事実だった。ハトの血中鉛濃度は、都心の渋谷、浅草などでは、対照地区とした所沢や多摩動物園で捕えたハトの血中濃度の30倍ほど高く、中にはヒトの鉛中毒基準値をはるかに超えるハトが何羽もいた。

では柳町交差点付近のヒトに鉛中毒は起こっていたのか。私たちは渋谷に頻繁に通ううちに、ガード下の靴磨きの人たちと仲良くなり採血させてもらった。彼らは一採血させてそばを通る車から出る排気ガスを吸いながら仕事をしている。しかし血中鉛濃度も、鉛が体内に入ると敏感に反応する赤血球中の酵素活性も、一般の健康人とまったく差がなかった。

私たちは、ハトに入る鉛の最大のルートは呼吸よりも、鉛に覆われた小石を飲み込むからだと考えた。この推測は、後に加鉛ガソリンの使用が禁止されて、大気中の鉛濃度がたちまち下がってしまった後でも、都心のハトの血中濃度が一年経っても二年経っても下がらない事実により支持されるものだった。ハイオクガソリンには鉛が入っていたし、都心で鉛粒子が小石を覆っている状態はさして改善されていなかった。小笠原島に移した

ハトから鉛が抜ける半減期も長いものだった。

ハトを捕らえても、血液や臓器や骨の鉛を計るため殺したのは最初の中だけだった。地域の汚染状況を知るには、0.5mlの血液で鉛の侵入に敏感な酵素活性を調べるだけでよくなったのだった。ハトの味方たちの顔を直視できるようになった。しかしその後ハーバード公衆衛生大学院に通うようになったとき、エジプト人の友人夫妻にこの話をする。と、「そんなもったいない」とよだれを垂らしそうな顔をされた。周知のとおり地中海沿岸諸国ではハト料理を賞味する習慣が今でもある。

四十年も昔の話である。今や足元もおぼつかなくのろのろ歩く老翁を、ハトも見くびっているのだろうか。ほとんど逃げようともしない。

かつて彼らの天敵であったことはもちろん知らない。



〈大井 玄略歴〉

一九三五年生まれ。
一九六三年東京大学医学部卒。
東京大学名誉教授。
元国立環境研究所所長。
臨床医の立場を維持しながら国際保健、地域医療、終末期医療にかかわってきた。

◆ドクターヨシダの一口コラム(33)◆ 父のこと(1)

医療法人和楽会 心療内科・神経科 赤坂クリニック院長

吉田 栄治

昨年の10月11日に、私の父が亡くなりました。享年84歳でした。

2年前には、母方の伯父夫婦が2月、9月と相次いで亡くなり、その間の4月には父方の伯母も亡くなり、年が明けた昨年も、母方の伯父が4月に、伯母が7月に亡くなりました。皆80代〜90代の高齢でしたが、いつまでもお元気でいてもらえるものと、どこか

かで思っていたところがあり、寂しさと悲しき、命のほかなさを痛感しました。また、親たちの世代を見送るそういう年代に、自分がなったのだなと実感しました。昨年は、なごやメンタルクリニックの原井院長のお父様もお亡くなりになっており、お悔やみを申し上げたところでした。

昨年、父が亡くなった折には、急ぎよ1週間ほどお休みをとらせていただき、一部の患者さん方には、受診予定を変更していただいたりと、ご迷惑をおかけしましたが、ご理解のほどありがとうございます。あわただしくお通夜、告別式をとりおこない、35日

の法要の準備、香典返しの手配など済ませて、東京に戻りました。その後も、折を見ては家の後片付けに実家に帰っています。先日の3月のお彼岸にも5連休をとり、墓参りをして、家の片づけをしてきました。時間はあつという間に過ぎてしまい、まだまだやらなければいけないことが残っています。

私の実家は愛知県の中島郡祖父江町(銀杏の生産で有名な土地で、今は稲沢市に合併されました)というところにあり、もともとは専業農家でしたが、農業の収入だけでは祖父父母、両親、子供たちの生活が成り立たず、私が生まれてしばらくしてから、父は中部電力に勤め始め、その後は兼業農家として生計を立てていました。私も子供のころには、田植えや稲刈りを手伝ったりしたものです。親戚が集まってきたり行く田植えや稲刈りは年中行事でなかなか楽しかった思い出になっています。しかし小規模農業というのは割に合わない仕事で、苦労が多い割に実入りが少ない

ものだなど子供ながらに感じていました。父もあまり農業に力を入れる気持ちはなかったようで、年をとってからは、徐々に田畑を人に貸して、自分たちでは農業はしなくなっていました。

私が防衛医大に進学し、母は、私がゆくゆくは家に隣接する畑に診療所を建てて開業することを夢見ていたようです。しかし、息子の私としては、開業をする気持ちはあま

りなく病院勤務を続けていくつもりでいましたし、あの田舎に診療所を建てても…とも内心思い、母には「そうだねえ、将来は、どうなるかなあ」などと言葉を濁してしました。そんな母が平成13年12月に亡くなり(ケセラセラVol.48に『お彼岸に当たって』という題でその時が書いてあります)、その後、私は縁あって平成15年9月より、貝谷理事長の経営する和楽会赤坂クリニックで院長として勤務することとなりました。

母が亡くなって約10年、父は、田舎で一人元気に過ごしていました。父には東京に出

てきてもらおうかとも考えましたが、長年住み慣れた故郷からは去りがたかったようです。幸い、地元の方々にも懇意にってもらい、ご婦人方を主体にした旅行にも母の代わりに男一人で参加したりと、結構、楽しくやっていたようです。近所の喫茶店に出かけたり、老人会で地元の温泉保養所に週に数回連れて行ってもらったりするのを楽しみにしていました。暇なときは、数独などのパズルに興じ、頭は案外しつかりしており、年に何回かは東京に遊びにきてもらい、身体も結構元気でした。

昨年1月には、私の娘の成人式にも、東京まで一人できてもらい、明治神宮に家族皆で参拝しました。吉田家は私の祖父も91歳まで生きており結構長命の家系で、長生きできそうな父に、4年後には米寿(米という字を分解すると八十八になることから88歳のお祝い)、6年後には卒寿(卒の略字が卒であることから90歳のお祝い)、15年後には白寿(百から一を引くと白という

ことで、99歳のお祝い)を祝わないとね、と話したところでした。

ところが、昨年3月の東北大地震の直後に、重度の貧血が発見され、骨髄形成症候群という難しい病気にかかっているらしいことが判明しました。簡単に言うと、血液を作っている工場である骨髄が老朽化し白血球、赤血球、血小板などの血球を作らなくなってしまう病気です。本人は、ちよつと動くと息切れがする程度で、深刻さはなく、いたって元気だったのですが直ちに緊急入院になりました。

(次号に続く)



〈吉田栄治略歴〉

一九五九年生まれ。
一九八四年防衛医科大学校医学部
医学科卒業。自衛隊中央病院第一
精神科、自衛隊岐阜病院精神科、
自衛隊仙台病院初代精神科部長を
経て、二〇〇三年九月より心療内
科・神経科 赤坂クリニック院長。

不安・うつのか(XXVIII) ■ ■ ■ 小説家・詩人 高見順氏の場合

医療法人 和楽会横浜クリニック院長 山田和夫

3月10日に「強迫性障害」わかつちやいるけどやめられない」をテーマに第8回不安の医学横浜講演会が開催されました。当日は冷たい雨だったにも拘わらず、270名近い方が参加して下さい、盛会裡に終える事ができました。私は「強迫性障害の有名人名人」について講演しました。「有名人名」の一番手として、今回の高見順氏について話しました。高見順氏の強迫性障害はとも有名で、精神医学のどの教科書にも名前だけは取り上げられていますが、具体的な症状経過までの記述はありませんでした。今回の講演会を契機に調べてみる事にしました。あともう一つ、高見順は私の母校東京都港区立東町小学校に「高見順文庫」があり、私の遠い小学校の先輩でもあるのです。小説家が生まれる様な土地柄ではないのに、どうして高見順という小説家が育つたのかも、昔からずつと気になっていた事でした。今回調べてみて、その壮絶な人生を知り大変驚愕し涙し、強迫性障害にもなる必然を強く感じました。元来は、恥ずかしがり屋の強度の赤面症、即ち社会不安障害がありました。

高見順は1907年(明治40年)1月30日、福井県知事坂本彰之助の非嫡子として福井県坂井郡三国町平木に生まれます。母親は高岡古代といいますが、坂本が三国町を視察に来た際、お世話係を命じられていた女性で、結果的に高見順(本名・高岡芳雄)が生まれる事になりました。その後高見順は、「私生児」として育つ事になりました。此の事は高見順に大変な負い目を負わせる事になります。強い屈辱と羞恥心を与えました。ですから自然に強い赤面症、社会不安障害になった訳です。「私生児」で

ある事は、地元で直ぐに噂になり、母親は逃げようとして1歳になったばかりの高見順と実母を連れ、父親のいる東京麻布飯倉にたどりつく訳です。父坂本は貴族院議員になっていましたが、この母子に面会する事は無く、知人を介して毎月10円を渡すようになりました。そのため親屋は御屋敷近くの港区竹谷町の陋屋に住むようになり、10円では生活費として足りず、母親は「縫い物」をして何とか生計を立てました。そして通い出した小学校が私の母校、東町小学校だった訳です。私は当時、竹谷町の隣の新堀町に住んでいました。高見順の小説世界には私が少年時代に慣れ親しんだ界限、都電、原っぱ、森が描かれていて、読んでいる中に、懐かしく私もその小説世界の中に入り込んでいました。しかし、その地元でも「私生児」である事は直ぐに噂になり、陰口をたたかれ、ひどいじめやからかいを受け続けました。勝気な母親は、いじめられ泣いて帰ってくる少年をいつも怒鳴りつけ、厳しく躰けました。それは強迫的で鬼気迫るものがありました。後ろ指を決して差されないと、少しでも悪い事をすると、手に御灸が据えられました。いつも正座させられ、行儀の良さが徹底されました。ですから自然と強迫的行動になっていきました。本家の息子が府立一中・一高と進学した事を聞き、「お前も一中・一高と行ってくれね」と言い続けました。そのため強迫的に勉強をしました。「私生児は一中には入れないんだよ」と同級生にからかわれ、絶望し自暴自棄になった事がありました。そのような差別は無い事が判り、結果的に東町小学校からただ一人一中(現都立日比

谷高校)に入学します。(因みに、私も日比谷高校を目指しましたが、学校群制度ができ、その夢はかないませんでした。)その事を父親に伝えようとしますが、一切面会は許されませんでした。高見順は、偉くなったら会ってくれるだろうかと夢を抱いていましたが、生涯、母子は父親と会う事はできませんでした。

社会不安障害の記述(わが胸の底のここには「から」)
「その日の漢文の時間に読まれるはずの日本外史の一節にあって、義経は妾の子なりというたつた四字の一句が、私をしてその日の漢文の時間をなんともはや恐ろしいものに考えさせ、結局その日の登校を不可能にさせたのである。まことに取るに足りぬその一句が中学一年生の私の内に惹き起こした激烈な苦悩については、この私自身、今は一種の怪事として回想されるくらいであるからして、他人にはもとより想像や理解もつかないことにちがいない。もちろん私の母親は妾というものではなく、私も自分を妾の子とは思っていません。けれど、私は教室でこの一句が誰か先生から指名された者によって声高く読まれるとき、あたかも自分が妾の子であるかのように、顔を真赤にしてしまうに違いない事は、実に確実な事として予想されるのであった。」
「そう言えば私はこの告白のなかで今までたびたび「顔を赤らめながら・・・」というところを書いてきたが、まったくこの私にはなにかというとす赤面するたはであった。それはどうにも阻止したい生理現象であった。自分の力で制する事の出来ない心理作用であった。」社会不安障害とはまさに「おそれの病」です。



フクロウ博士のチョット一言

人にもものをほどこす心あるものは 富貴に生じ(無住)

この言葉は鎌倉時代の臨済宗の僧、無住の言葉です。この後に「人を敬う心あるものは高位に生じ、慈悲の心あるものは生命長く、忍辱の心あるものは形能く」と続きます。この言葉のままを訳すと「良いことをする心ある人は金持

ちになり、人を敬う心がある人の家は位が高くなり、慈悲の心があれば長生きする。辱めを受けても動揺しない忍耐強い人は容姿がよくなる」となりますが、中野先生は「心豊かだから人にもものをほどこす。心が清らかだから人を敬

う。命がのどかだから人の痛みがわかる。心の姿がよいから行動が穏やかである。」と読まれています。

(中野東禅著 人生の問題がすっと解決する名僧の一言 三笠書房 より)

強迫性障害の記述（わが胸の底のここには）から）

「神経衰弱と言えば私はひとたび自分に関係した事となると、どんなつまらぬことでもこたわって、気を探みくよくよする神経衰弱的な私たちについて、やはりその頃こんな事を考えていた。」

「私は幾何が好きだった。ところで幾何の問題に熱中しているの不经意に『点トハ大キサナキモノデアル』ということが、あたかも夢魔のように襲ってくる事があり、するとそれにこたわって、我ながら始末に困る混乱に落ち込むのであった。『直線トハ長サノミアリテ幅ナキモノデアル』という定義も、点の定義に劣らず私を悩ませた。時々思わぬときに、それに捉えられて苦しめられるのであった。正に強迫性障害とは「こたわりの病」です。

高見順は母親の期待通り、一中一高文科甲類（現東京大学文科一類）と進学しますが、その後はエリートコースは歩まず、自己の苦しい、不当な生い立ちから、自己を確立してからは、文学と社会主義に目覚め、一高社会思想研究会に入会します。18歳時、ダダイズムの雑誌「廻転時代」を創刊し、校友会文芸部委員に就任します。

一高卒業後（20歳）東京帝国大学文学部英文学科に入学し、同人雑誌「文芸交錯」創刊に参加します。左翼芸術同盟に参加し、東大の左翼系同人雑誌「大学左派」創刊にも参加します。劇団制作座の仕事にも従事し、劇団員でした石田愛子と知り合い、その後結婚します。23歳で東大を卒業し、日本プロレタリア作家同盟（ナツプ）に参加しますが治安維持法違反の疑いで大森署に逮捕され、小林多喜二「蟹工船」の著者）を拷問で殺害した特高

刑事から激しい拷問を受け、結果的に「転回」し半年後に釈放されます。この屈辱と汚名から更に悲惨な事に、帰宅後妻が別な男性と駆け落ちした事を知ります。何重にも屈辱と懊悩が押し寄せました。これらの体験を元に『如何なる星のもとに』を「文芸」に発表（32歳）

高い評価を得て、逆に作家としての地位を確立します。しかし、本当に「如何なる星のもとに」生まれると、このような過酷な人生を歩む事になるのでしょうか。『文学的自叙伝』には「その悲しさにぶつかって、私は初めて文学的開眼を得られたと言っている。人生的開眼はとりもなおさず文学的開眼でもあった」と言わしめています。「不幸」をありのままに「吐露」する事で、人間の宿願の真実が描き出されるといふ私小説の作風も確立します。詩人としても活躍し、「樹木派」、「わが埋葬」、「死の淵より」等を発表し生の懊悩を鎮魂するようになりに静かに謳い上げています。永井荷風と並ぶ日記作家としても知られ、昭和史の資料ともなった高見順日記」を著してします。奇しくも、永井荷風と高見順は従兄弟にあたりますが、永井荷風は高見順が私生児である事を知って、忌み嫌っていました。高見順もその事を知り嫌悪してました。しかし血は争えないもので、全く違う生育をしながらも、同じような業績を残すという事は、血の繋がりの測りし得ない深遠さを思い知らされます。

晩年は、近代文学の資料の散逸を防ぐため、日本近代文学館の建設に尽力しましたが、落成まじかに食道癌で亡くなりました（享年58歳）。これらの多くの業績から、文化功労者が追贈されました。日本の文化功労者になった事で私生

児として蔑まれた汚名は母親とともに払拭されたと思います。これも母親の強迫的なまでの厳しい躾と、そこから生じてきた社会不安障害や強迫性障害による賜物と思えます。激痛のあり続けた御灸に耐え続けた事で、人生の様々な難苦に耐えられ、強迫的なこだわりは勉学を進ませ、言葉の正確な表現に対するこだわりから、魂に響くような名文・名作が作られていきました。まさに「強迫の力」でした。高見順の御墓は多くの文化人が眠る鎌倉東慶寺の、小林秀雄の墓と向かい合っており立っています。亡くなった日は1965年（昭和40年）8月17日でした。8月17日は私の誕生日でもあります。不思議な縁を感じます。



〈山田和夫略歴〉

和楽会横浜クリニック院長、東洋英和女学院大学人間科学部教授。一九五二年東京生まれ。一九七四年東京大学医学部保健学科中退。一九八〇年横浜市立大学医学部卒業。二〇〇〇年横浜市立大学医学部市民総合医療センター精神医療センター部長。二〇〇二年東洋英和女学院大学人間科学部教授。二〇〇三年和楽会横浜クリニック院長。日本うつ病学会監事、多文化間精神医学会理事・執行委員、日本病跡学会理事・編集委員長他。主要著書「うつ病は本当に完治するか」「抗うつ薬の選び方と使い方」「新世紀の精神科治療②気分障害の診療学」「今日の治療指針②〇〇四・難治性うつ病」他

野鳥図鑑



【ソウシチョウ】

今、この鳥が全国的に生息域を広げている。本来、インドや中国、ベトナムなどに分布しているのだが、美しくかわいい鳥なので古くから飼鳥として親しまれてきた。それが逃げ出し、自然繁殖を始めたのである。このような鳥を外来種というが、もともとの日本の野鳥にどのような影響を及ぼすのかが懸念されている。

撮影 日本野鳥の会 岐阜代表 大塚としゆ 大塚としゆ